

収蔵展「自筆から見る浜松ゆかりの文人たち」のご案内 同時開催「災害と文学」

3月9日から「自筆から見る浜松ゆかりの文人たち」の展示が始まりました。今回は収蔵品の中から、鷹野つぎ、相生垣瓜人、菅沼五十一を中心に、浜松にゆかりのある文人たちの自筆原稿や作品を展示しました。

自筆の原稿には、活字で表現された作品とはまた異なる味わいがあるものです。手書きの文字からは作者の息遣いのようなものが聞こえてきます。その字形や推敲の跡を知ることにより、作者がいっそう身近に感じられるのではないのでしょうか。

会場の一角には、鷹野つぎの文字を写し書きするコーナーも設けましたので、ぜひなぞってみてください。

また、今回は全国文学館協議会からの共同展開催の呼びかけに応じ、当文芸館でも「災害と文学」と題して、災害を題材とした書籍や市民の皆様からの投稿作品を展示しました。

東日本大震災から満2年を迎えるこの時期、文学を通してその風化に歯止めをかけるとともに、今一度防災意識の高揚につなげていただけたらうれしく思います。



【主な展示品】

- 鷹野つぎ自筆原稿・・・「希望」「わが悲しき愛児の記」「震災記」
- 相生垣瓜人創作メモ・・・「癸巳抄」「微茫抄」「海坂俳句手帳」
- 菅沼五十一・・・詩「燕」「森」、「ですべらの記」、「遠州・駿河の民話」
- 長塚節額装「星」、正岡子規軸装「子規絶筆三句」、曾宮一念原稿「大井川の西」
- 市民投稿作品・・・俳句、短歌
- たかはたけいこ著「3・11備忘録」「彷徨、新生。」 他

文芸館の四季



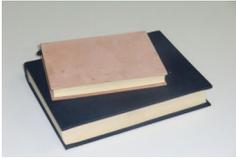
陽射しは確かに春。しかし、まだ冷たい風の中でヤブツバキの花を見つけました。光沢のある濃緑の葉から見え隠れする紅の花は、まるでにかむ幼女が物陰から顔を覗かせているかのようです。

風がなく、静物画のように動かない花の姿を観るのもよいものですが、一陣の春風に乗って揺れる様子もまた、自分の意志で咲いている喜びを表現しているようで、心が浮き立ちます。花びらが同じ方向を向いて、まるでマ스ゲーム(集団体操)をしているようです。

あまりはしゃぎ過ぎて、枝から離れてしまうのではないかなどと心配になってしまいます。

お知らせ

- 『浜松市民文芸』第58集に入選された方への本の贈呈を文芸館事務室で行っております。該当される方は半券を持ってお申し出ください。また、1冊500円で販売もしております。宜しかったらお買い求めください。



中島敦と浜松

「山月記」「李陵」「名人伝」他の名作を残し33歳で夭折した中島敦は、大正7年(1918)6月末、父田人の県立浜松中学校(現・浜松北高)転勤に伴い、奈良県の郡山尋常小学校から浜松西尋常高等小学校(現・浜松西小)3年に転入し、市内松城作左山131番地に移り住んだ。

浜松には、父の長兄靖の次女長根婉が中学校教員の夫禅捉や二人の子供と住んでいた。敦より三歳下の婉の次女翠は、「敦一家との最初の付き合いは浜松時代で、これは私たち一家が先に住んでいたところ、田人一家が奈良の郡山から移って来たためでした。お互いに家も近く、一緒に海水浴などにも参りました。」(「兄貴分として」)と書いている。朝鮮の京城転勤は敦一家の方が先だったが、そこでは一時青葉町の家同居したこともあり、二人は兄妹のような関係だったようだ。

転校間もない1学期の通告表には、「成績ガ優秀デスカラ最モ健全ナ御身体ノ御養成ガ肝要ト存ジマス ソレデ当御休ミニハ学科ノスペテヲ打捨テ、御静養ナサル様希望イタシマス」(田鍋幸信「中島敦年譜」)とある。3年次の成績は、皆勤でオール甲であった。郡山、浜松、京城のいずれの小学校でも敦は優等賞を授与されており、成績は抜群だったが、身体が弱かったことがわかる。大正9年9月、田人の竜山中学校転勤により敦の浜松時代はわずか2年と2か月余で終わった。

敦自筆の履歴書に「幼ヨリ父兄ニ就キテ国語漢文ヲ研修ス」とあるように、儒者となった祖父撫山の教えを受けた6男2女はすべて学を好み、長兄、次兄、三兄は共に漢学者、末弟の敦の父田人は旧制中学の漢文教師となった。

田人は、浜松中学でも漢文を教えた。彼の赴任前に漢文を教えていたのは、小山正と加藤雪腸だったと思われる。掛川中学で後の直木賞作家榛葉英治を落第から救った小山は、田人より1年早い大正6年4月から昭和8年12月まで、浜松中学校で国語と漢文を教えていた。遠州国学研究の第一人者で、「内山真龍の研究」ほか多数の名著があり、文学博士号を得ている。同じ国漢教師として、親しい交流があったのではないかと思われる。

加藤孫平(雪腸)は大正5年8月、田人赴任の半年前に、20年にわたる教員生活に別れを告げて実業界に転身していた。雪腸は修身、国語、漢文の担当だった。

翌大正9年入学した井上靖が体操等を教わった、学校中で一番怖かった花井楊五郎も田人の同僚の一人だった。短編小説「孤猿」や随筆「忘れえぬ人々」等に花井先生が描かれている。靖と田人は5か月浜松中で一緒だったことになる。靖と敦は靖が2歳年長。生まれたのは共に5月で、靖が6日、敦が5日である。